

# 西鶴と太宰治

『新釈諸国噺』「女賊」試論

宮本 祐規子

## 一 はじめに

太宰治『新釈諸国噺』は、井原西鶴の翻案作としてよく知られる作品である。

太宰は、第二次世界大戦最中の昭和二十(一九四五)年一月、生活社から『新釈諸国噺』を刊行した。本作には十二篇収載されるが、これらは全て西鶴の作品を原拠とし、翻案したものである。そのうち「貧の意地」「人魚の海」「裸川」「義理」「女賊」は雑誌に既に発表されたものであり、他七篇は書下ろしであった。その創作意図については、本作「凡例」の中で「西鶴の全著作の中から、私の気にいりの小品を二十篇ほど選んで、それにまつはる私の空想を自由に書き綴り、『新釈諸国噺』といふ題で一本にまとめて上梓しよう」と計画した、と太宰自らが述べている。

右記に加え、「凡例」に「西鶴は世界で一ばん偉い作家である。メリメ、モオパッサンの諸秀才も遠く及ばぬ。」と記されたことから、本作は西鶴をよく理解した上で翻案された作品とされた。太宰の生前にあつては最も広く読まれた著作の一つ

であったことから、好意的な評価の上で論じられてきた。確かに、『新釈諸国噺』は全十二篇の作品を収めるが、選ばれた西鶴作品は一作も重なっておらず、それだけ太宰が西鶴の作品を満遍なく読んでいたことに間違いはないだろう。

一方で、西鶴の元作品と太宰の翻案を比較する時、そこには明確な差異が存在する。すでに「猿塚」については、西鶴原文を『日本古典全集』で読んだことに拠るミスリードを中心に論じたことがある<sup>(注1)</sup>。本稿では、以前『新可笑記』の解説をした際に紹介したことのある「女賊」から『新釈諸国噺』における太宰の西鶴理解について考察を試みたい。

## 二 先行研究

「女賊」は西鶴『新可笑記』巻五―四「腹からの女追ひはぎ」を翻案した作品である。「腹からの女追ひはぎ」は、「腹から」に「生まれつき」と「姉妹」の意味を掛けていると考えられ、名高い盗賊の父親が亡き後、盗賊稼業に手を染める姉妹の改心が描かれる。これに太宰は多くの改変と付加を施し、翻案している。既に先行論文<sup>(注2)</sup>に、太宰が付加したのは「悪」に対する積

極的な姿勢である、と指摘があるように、西鶴の翻案作として評価されている一篇と言える。

さて、『新可笑記』は、元禄元（一六八五）年に刊行された大本五卷五冊、全二六章から成る、武家物浮世草子である。序文で、「笑ふにふたつ有。人は虚実の人物。」と述べる部分には、例えば人が楽し気に笑う場合、同じ「笑い」といつても作り笑いと心からの笑いの二つが存在することを指摘し、人の内心の闇を捉える西鶴の人間認識が表れている。これは、他の作品とも通底する認識と捉えられ、既に、

本書（『新可笑記』——引用者注）刊行の前年の『懐硯』では「まことに心は善悪二つの人物ぞかし」（四の一）と述べ、また本書と同年刊行の『永代蔵』では、「人は実あつて偽りおほし」（一の一）と類似の発言をしている。すなわち、本書執筆のころは、人の虚実、善悪二心のあり方に着目し、これを洞察描写しようとする<sup>（注5）</sup>との指摘がある。

序文では、仮名草子『可笑記』の名を借りて本作を著す、とも記しており、『新可笑記』において「笑い」は重要な要素であると言えよう。これは、『新釈諸国断』において太宰が付加した要素として、どの作品にも共通するのがコミカルな描写である点と重なる。その点で、「女賊」は最も太宰の翻案に適した作品であったとも考えられる。

しかしながら、西鶴の描こうとした笑いと太宰の笑いの認識には、差異が明確にあるようにも見える。その差異は何か、そして西鶴の目指した笑いを太宰は理解していたのか。太宰の西

鶴理解の一助として、登場人物設定について確認していく。

### 三 盗賊

まず、『新可笑記』冒頭、社会状況についての前置きを、太宰は描写しなかったことで、社会が荒れていたから盗賊稼業をせねばならなかった、追い詰められた状況であったかもしれない背景が取り除かれている<sup>（注6）</sup>。

また西鶴の盗賊は、「陸奥にかくれなき盗賊」で「身のほどしらぬ奢を極め」、都で「美女を見出し、是恋わび」故郷に連れ帰る。数年後に病死するまで、心内描写はほぼ無く、あくまで粗野な盗賊の定型のような人物設定である。

一方、太宰は、盗賊の人物描写を細かく行う。彼は「吝嗇」であり、「立派な口髭を生やして拳措動作も重々しく」、山賊らしい毛皮ではなく「着物に紋付きのお羽織」を着し、「謡曲なども少ししたしなみ、そのせいか言葉つきも東北の方言と違って」武士のような言葉遣いをする人間である。一方、「酒は飲むが女はてんで眼中にない様子」で、部下に擲掬されると「仙台には美人が少く候」と眩く。そして、田舎大臣の体裁を整えて都に美女を探しに出、没落公家の娘に一目ぼれをし、父親に金銀財宝を積んで結婚を申し込む。

ここには、粗野な盗賊の内面（往來の旅人をあやめて金銀荷物横領）する稼業の内容に西鶴との差異はない。）を隠そうとする計算が見える。その冷静な計算は、盗賊の人物設定に酷薄さと恐怖を与える。例えば、娘の父親である公家を金銀財宝で懐柔する場面において「にやりと凄く笑い、案外もろく候、

と言った」盗賊の「凄」い笑いと、いくら表面を取り繕ったところで、人殺しを稼業とする人間の怖さを滲ませる。西鶴に比し、より怖い自己中心的な人間として描かれている。

そのためか、太宰は盗賊の最後を病死ではなく、「天罰下り、雪崩の下敷になって五体の骨々微塵にくだけ、眼もあてられぬむごたらしい死にざま」と変更する。悪に対する「天罰」が下ったとするこの描写からは、救いも与えられないほどの悪事を重ねてきた人物である、という太宰の付加した設定が強調される。

#### 四 妻と娘

一方、盗賊の妻になつた女性について、西鶴は、「何となくくだりて」と、父親に結婚を申し渡されたから従つた、当時の女性としては当然でもある、主体性がない女性と描く。彼女は流されるように都から陸奥に連れてこられ、「次第によしなき世わたりを見て」初めて、夫となつた人の稼業が盗賊であつたことを知る。当然「浅ましくかなしく」思うが、「かへる道もするべなく」逃げることも選べない。そのため、「兎角は身捨」と自害を決意するが、やはり死ぬのは怖く「是までと極し日数もふりて」死ぬことができない。そのうちに「なじめば」盗賊稼業に恐怖を感じなくなり、「自から夫の悪心に同じ」と悪行にも慣れ、娘を二人産む。ここには、悪事を恐れる善人としての繊細さと、自害を決意するが命を失うことの恐怖から迷い動けなくなり、生きることを優先させることで悪事に慣れていく遅しさとの両面が描かれる。だからこそ、夫亡き後、彼女は

「すくなる心を今はゆがめて」幼い娘を育てるために盗賊行為を行う。娘が成長した時も、本来なら母親から娘に伝えるべき「里ちかき今日の細布織」を、京育ちで教えることはできないために、仕方なく「夫の悪事を是にまで伝へ」て盗賊行為を勧める。娘たちも「母を羽護込」むために盗賊稼業に勤しむ。悪事をしながらも、その裏面には、できれば悪事を避けたいと思う心が存在する、という人間の二面性がえぐりとられている。

一方、太宰は、ひたすらに泣き続け「眼を泣きはらして猿顔のようにな」つて陸奥に到着した娘が、夫の盗賊稼業を知り「ぎくりとしたものの」、「女はこうなると度胸が良い、ままよと観念して」積極的に悪事に参加するようになり、「眼にはいやな光りがあり」「鬼女のような凄気配」を持つように変化する様を描く。ここに、悪事に葛藤する描写はない。夫が亡くなるまでの年月も長いため、娘二人は既に成人しており、育てるために悪事をせねばならない理由もない。娘たちも、父親が亡くなったことを契機に盗賊行為をするが、自ら率先して提案する。「おさむらいはこわいな。じいさんばあさんか、女のひとり旅か、にやけた商人か」と成功するだろう対象をリストアップする冷静さもある。「少しは親を大事にする気持」はあるため母を留守番させるが、どんどん過激化する盗賊行為の内容からは、悪行に臆する気持ちは全く感じ取れない。

以上のように、西鶴と太宰では、悪行に対する積極性と、悪行をせねばならなかった理由が大きく違っている。そのため、娘二人が、絹の反物を得た時、太宰は「おどして得た」が、西鶴は「誰かは置わずれぬ」と拾った設定にする。この絹は、姉

妹がそれぞれ自分で独り占めしたい、と思い、お互いを殺して手に入れようと決めるが、墓地で火葬の煙を見て改心する、という話の展開において、重要なカギになるものである。盗賊稼業で生計を立てている姉妹にとって、絹の入手方法は、脅して得るのが当然だと思われる。しかし、唐突に大量の絹が一本道に落ちていて、というあり得ないような設定にしてまで、西鶴は悪行への積極性から距離を取る。もし、改心する契機になる絹を悪行で得ていれば、火葬の煙を見ただけで改心する姉妹の心のゆらぎが説得力を持たない、と考えたのであろう。先述したように、西鶴の描く女性たちは、善悪両方の心を持ち、揺れながら生きている。だからこそ、「野墓の焼るを見て姉無常を觀じ」反省し、出家にまで進む行動力を持ち得た。一方、太宰は火葬の様子を見て「こわい」と言わせる。この「こわい」という一言は、夕闇の墓地への本能的な怖さである。つまり、悪行に積極的な姉妹にとって、盗賊行為と相對するものは善心ではなく、女らしい気持ちや本能的な恐怖である。墓地を見てすぐに無常を觀じるのではなく、「こわい」から咄嗟に念仏を唱えることで無常を觀じる、と善心では揺らがない人物の心境の変化が説得力を持つ、秀逸な表現と言えよう。

ところで、藤原耕作氏は、女親の造型変化について、

戦時下の状況との関わりから読むとすると、この女に託されていたのは、愛国的な（銃後の妻）のイメージではなかったか。軍人である夫を支え、その価値観に積極的に同じると共に、子供を将来の軍人として育成しようとする。（中略）国家的な盗賊行為ともいえる侵略戦争のイメージ

が軍人と盗賊とを結びつけ、彼らの行為をその内実を問うことなく盲目的に支えようとする女の姿勢が、ここでは批判的に眼差されているようにも思える。「女賊」に女やその娘たちへの批判的な眼差しがあることは、（中略）「父子二代の積悪はたして如来の許し給ふや否や」と含みを持たせている点に、端的にあらわれているだろう。<sup>（注7）</sup>

と時代的な背景を指摘する。確かに、太宰が女親や娘たちに悪行への積極性を付与していることは、確認してきた通りである。しかし、その理由には、西鶴の描きたかった人間の二面性という要素を取り上げなかったが故に生まれた齟齬を埋めるための工夫と考えてみたい。

## 五 おわりに

西鶴は『新可笑記』序文で、人間には虚実があるのだ、と説いた。「腹からの女追ひはぎ」において、女親も姉妹も虚実を持つ人間である。善の心と悪の心を両方内包しているがゆえに、悪事と分かっているながら盗賊行為を行ったり、簡単に他人の物を欲しがる。しかし、親孝行の心は持っていたり、ちよつとした契機で同情や反省も持ちうる。以前に拙稿<sup>（注8）</sup>で左のようにまとめたことがある。

善の感情から悪の行為が生まれ、悪心と善心は些細なことで入れ替わります。女性達は、生まれた時から完全な悪人ではありません。ただ、諦め、慣れなどの心の中になる弱さによって、善に属する感情を持ち合わせながらも悪行をかさねていくのです。

悪事を行う人間は悪人だ、と断罪し言い切れないのは、善悪の行動のどちらに示されるのが本当のその人なのか、判別はできないものと考える西鶴の人間理解による。西鶴はそれを「虚実」と言い、そこに悪に対する救いの余地を残さざるをえなかった。一方で、太宰が悪人とカテゴライズすることに悩まないのは、外面に表れた言動のみを判断材料とするからである。軽快な筆致で描かれる盗賊は、西鶴に比べよほど具体的な人物像を結びやすいが、そのどこことなくコミカルな説明も、冷酷な悪人像を優しくはしない。あくまで悪人であるがゆえに、盗賊には天罰として惨たらしい事故死が与えられるのである。

ところで、岩波文庫『お伽草紙・新釈諸国噺』巻末には、高橋源一郎「母親」の文学」という小文が付される。

知識人の文学である漢詩・漢文が「男」のものなら、柔らかな西鶴の「ものがたり」は「女」のものだ。(中略)  
「人魚の海」でも、「貧の意地」でも、「裸川」でも、「義理」でも、そこに登場する人物たちは常軌を逸した行動に出るが、それは、どんなに巨大ななかに追い詰められても、いや追い詰められれば追い詰められるほど、彼らは、「本音」の行動に出ようとする倫理の持ち主だからだ。そして「本音」の行動とは、いつも常軌を逸しているのである。

もし太宰が「本音」の行動に出ようとする倫理の持ち主」を描こうとしたと仮定するなら、西鶴は「本音」以外に行動規範を持つ人を描こうとしたとは言えないか。「常軌を逸した行動」のように見えても、そこには各人の規範が厳然と存在する。

それは武士であっても町人であっても時代的に自然と得ていた認識で、太宰の時代には失われていたものもあった。例えば「女賊」であれば、本音とは盗賊行為で稼ぐことになる。しかしそれが悪事であると知るがゆえに、盗賊行為をせざるをえない理由「母をはごくむため」と親孝行せねばならないという当時の道徳規範を、行動規範として設定する。その規範を自らも持つがゆえに、西鶴は親子三人に共感すべき部分があり、救いを与えたのだろう。(ちなみに、その救いは仏にすがるといのものであったが、親子は罪を犯しているがゆえに、人が救えるものではない、という当時の認識は、見えぬ神仏ではなく人に許しを得ようとしがちな現代の感覚とは異なることにも注意が必要だろう。)

前節までで述べたように、西鶴の人間理解と太宰のそれとは明確に違う。その理由の一つが、時代に共通する行動規範認識の差異だとするなら、その差異を埋める何かを、太宰に見出すことができないのであるために、太宰の西鶴理解についても疑問を持たざるを得ないのかもしれない。これは太宰のせいというわけではなく、読者を含めた享受者の問題でもある。太宰の読者にも西鶴と共通する認識が無い以上、そこを説明する必要がある。そのために付加する情報量は多大になり、西鶴の人物とは設定が大きくかけ離れていかなるをえない。しかし、その設定の懸隔故に、太宰のキャラクターは独自性を持ち、新しい作品を作り出していったともいえる。その西鶴とは違う面白さは、パロディ作品ではなく翻案作品としての『新釈諸国噺』の完成度の高さでもある。西鶴への理解が深いかどうかはともか

く、素材としての西鶴利用には、太宰の手腕が遺憾なく發揮されていている作品と評価できよう。

注

1 本稿における本文の引用は、『新釈諸国噺』は『太宰治全集』（筑摩書房、一九九〇）、『新可笑記』は『新編日本古典文学全集六九 井原西鶴集四』（小学館、二〇〇〇）に拠る。

2 拙稿「西鶴と太宰治『新釈諸国噺』——「猿塚」を中心に」（『国文目白』二〇一〇・三）

3 拙稿「女たちの闇」解説（『江戸のダークサイド』ペリカン社、二〇一〇）

4 『対訳西鶴全集九 新可笑記』（明治書院、一九九二）注釈

5 木村小夜『太宰治 翻案作品論』（明治書院、二〇〇〇）、杉本好伸「太宰治と井原西鶴——新釈諸国噺「女賊」を中心に」（『安田女子大學紀要』安田女子大学・安田女子短期大学編、一九九三・三）栗原敦「『女賊』再読」（『太宰治研究』和泉書院、二〇一四・六）。その他『国文学太宰治必携』（学燈社、一九八〇・七）、『別冊国文学太宰治事典』（一九九四・十）、『太宰治作品研究事典』（勉誠出版・一九九五・十二）、寺西朋子「太宰治『新釈諸国噺』出典考」（『近代文学試論』、一九七三・六）、勝原晴希「二人の諸国ばなし——井原西鶴と太宰治」（『江古田文学』二〇〇二・十一）、南陽子「太宰から西鶴を讀

む——「義理」をめぐる悲喜劇」（『近世文学研究と評論』二〇〇二・十一）、木村小夜「井原西鶴と太宰治——昭和一〇年代・西鶴再評価の中で」（『太宰治研究』二〇〇四・六）、小泉浩一郎「太宰治と歴史小説」（『資料と研究』二〇〇五・三）、安田義明「太宰治『新釈諸国噺』論——わたくしのさいかく」への変容を視点に」（『國學院短期大学紀要』二〇〇八）、竹腰幸夫「太宰治『新釈諸国噺』論——反俗のかたち」（『静岡近代文学』二〇一二・十二）などを参照した。

6 前掲3書解説

7 西鶴は、本文中に「後奈良院大永二年」という年号を記すが、これは本来後柏原天皇の年号である。太宰は「後柏原天皇大永年間」と変更しており、歴史的事実に依拠した訂正箇所といえる。

8 藤原耕作「太宰治『新釈諸国噺』論」（『國文論叢』神戸大学文学部国語国文学会、二〇一三・九）

9 前掲注2書  
岩波書店、二〇〇四

〔付記〕本稿は、JSPS 科研費 19K13066 の助成を受けたものである。

（本学准教授）